

「白バラ」研究の動向

村上公子

もはや四半世紀になろうとする以前から、ミュンヘンの大学生を中心とする反ヒトラー政権の抵抗活動「白バラ」を追い、未だに自分なりの考察の筋道をまとめる目処さえついていない。自ら顧みても、これは研究というより、もはや道楽に堕しつつあるようで、忸怩たる思いである。

せめて、ここ数年間、ミュンヘンの現代史研究所やベルリンのドイツ抵抗記念館で資料とにらめっこをしている間に見知った、ドイツにおける「白バラ」研究の流れの幾ばくかをご紹介し、若い世代の方たちの参考にしていただければ、多少とも何かのお役に立つのではないかと、否、お役に立てば、と願うばかりである。とはいえ、ご紹介するのは出版されているもの、公開されている資料ばかりで、何も特別なものではない。インターネットを用いれば、すべて確認できるようなものだが、まあ、その確認作業のきっかけくらいには、なってくれるのではないだろうか。

紹介の中心となるのは、2011年に出版された Christiane Moll (Hrsg.), *Alexander Schmorell Christoph Probst Gesammelte Briefe*, Berlin, 2011. である。

この書簡集は、筆者が勤務先から与えられた特別研究期間でベルリンに滞在していた2008年に、既にドイツ抵抗記念館のプロジェクトとして、調査・編集が進められていた。館長のトゥーヘル氏は、2008年当時「来年には出版される」と明言していたのだが、それが毎年「来年には」ということになって、事情を知る関係者、並びに研究者は、首を長くしてその実現を待っていた。巻頭に付された编者前書きによれば、シュモレルとプロプストの書簡が遺族から、出版を前提として提供されたのは2002年だそうである。そこから数えても9年という時間をかけて、编者モルは非常に丁寧、詳細、綿密な調査を繰り返し、ほぼ可能な限りの裏付けを踏まえて、この書簡集を編み上げたのだ。

では、いったい何故に、この書簡集がそれほど待たれていたのか。そもそも、シュモレルとプロプストとは何者か、と問われる方も少なくないだろう。日本の場合は、その前に、「白バラ」って何？という質問が出かねないが、そこから説明を始めると、余りにも話が長くなるので、先に述べた「ミュンヘンの大学生を中心とする反ヒトラー政権の抵抗活動」をした人たち、ということ

で止め、詳しくは日本語でもまだ入手できる書籍⁽¹⁾、あるいは、手軽なところではウィキペディアなどを見ていただきたい。

いうまでもなく、特に日本語のウィキペディアの記述は、場合によって余り信用しない方がよいことがあり、「白バラ」(ちなみにウィキペディアの項目名は「白いバラ」になっている)についても、首を傾げたくなる部分は少なくない⁽²⁾。それはともあれ、おそらく一番近づきやすい「白バラ」の解説であろうと思われるので、ウィキペディアの記述を見ると、目立つのは「ハンス・ショルとその妹ゾフィー・ショル」とか、「ショル兄妹」という名前である。アレクサンダー・シュモレル、クリストフ・プロープストという名前も確かに記されているが、明らかに脇役の扱いである。

これは別に日本のウィキペディアだけの話ではなく、ドイツでも一般的には、「白バラ」イコール「ショル兄妹」とイメージされていると言っても、大きな間違いではない。後段でそうなった事情にも多少触れるが、ここではとりあえず、一般に「白バラ」というと、多くの人がハンスとゾフィーのショル兄妹を思い浮かべ、それ以外のメンバーは二次的、三次的な存在のように扱われることが少なくない、ということを確認しておく。

実を言うと誰が「白バラ」の「メンバー」なのか、そして「中心メンバー」は誰か、と言う問いに答えるのは、それほど簡単ではない。ただ通常、「白バラ」を解説する場合、1943年2月22日と同年4月19日、ベルリンからミュンヘンに出張してきた人民法廷長官ローラント・フライスラー指揮下の公判で死刑判決を受けた6人が「白バラ」の中心メンバーであると説明されている⁽³⁾。

- (1) 一応ここでは現在入手可能なものを上げておく。

インゲ・ショル(内垣啓一)『白バラは散らず——ドイツの良心ショル兄妹』(未来社、1964年); クリスティアン・ベトリ(関楠生)『白バラ抵抗運動の記録——処刑される学生たち』(未来社、1971年); 関楠生『「白バラ」——反ナチ運動の学生たち』(清水書院、1995年); M.C. シュナイダー/W. ズュース(浅見昇吾)『白バラを生きる——ナチに抗した七人の生涯』(未知谷、1995年); フレート・ブライナーズドルファー編(石田勇治/田中美由紀)『「白バラ」尋問調査——「白バラの祈り」資料集』(未来社、2007年)

- (2) 「白いバラ」

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E7%99%BD%E3%81%84%E3%83%90%E3%83%A9>
(2012年9月27日閲覧)。

他にも問題のある記述は散見されたが、明らかな誤りのみを上げる。「逮捕と処刑」の項最後の文で、「プロープストの未亡人・孤児」とあるのは「フーパー」の間違い。またこの件での逮捕者の1人は死刑になっており、「6カ月から10年の懲役」というのも正しくない。

- (3) 注1であげた、シュナイダー/ズュースの邦訳副題が『ナチに抗った七人の生涯』になっているのは、従って、かなりはっきりした主張をしていることになる。ちなみに、ドイツ語の原著題名には、メンバーの数は登場しない。

1943年2月22日に裁かれたのは、ショル兄妹とクリストフ・プロープストの3人で、3人ともに死刑判決を受け、同日処刑された。アレクサンダー・シュモレルは、同年4月19日、通常第二次白バラ裁判と呼ばれている、「白バラ」に関わるものとしては最も規模の大きな人民法廷の公判⁽⁴⁾で、主犯の1人として、他の2人（ヴィリー・グラーフおよびクルト・フーバー教授）とともに死刑判決を受けた。つまり、プロープストもシュモレルも、政権によって処刑されたという点では、ショル兄妹と同じ「白バラ」中心メンバーなのである。

しかし、単に死刑になったということだけを考えれば、ヴィリー・グラーフおよびクルト・フーバー教授という2人も同じである。いったいどうして、シュモレルとプロープストの書簡集がそれほど待たれていたというのか。それは、この2人に関しては、直接的な資料に基づく、しっかりしたまとまった人物描写が、独立した出版物としては、それまで存在していなかったからである。

「白バラ」の解説書、研究書には、通常上述のとおり、フライスラーから死刑判決を受けた6人が中心メンバーとして上げられており、各々の出自や経歴も紹介されているし、場合によってはその書簡の引用なども行われている。しかしそれはあくまでも6人のうちの1人としての記述であり、分量もそれほど多くはない。何よりも、「白バラ」の活動全体を対象とする場合には、どうしても、1943年2月18日に、ショル兄妹がミュンヘン大学構内でビラを配布して逮捕された、という事実に関心する者の興味が惹かれがちで、勢い、ショル兄妹、なかんずくハンス・ショルの行動や心理の分析が試みられることが多い。そのような理由で、ショル兄妹に注目が集まるのはやむを得ないところがある。が、それ以外にも、ショル兄妹が「白バラ」の代名詞のように受け取られるようになった事情が別に存在する。それは、兄妹の長姉、インゲと、その著書『白バラ』⁽⁵⁾の存在である。

この書物は、ドイツ連邦共和国成立後それほど経たず、第二次世界大戦中に反ヒトラー政権の抵抗活動を行った人々に対して、一般のドイツ人がまだ「売国奴」という言葉を投げつけかねない時期に出版され、以後現在に至るまで、版を重ね続けている。ここで述べた状況からも想像されるように、このささや

Michael C. Schneider/Winfried Süß, *Keine Volksgenossen. Studentischer Widerstand der Weißen Rose, The White Rose*, München, 1993.

(4) この公判では、全体で14人の被告が裁かれた。3人の死刑判決の他は、10人が10年から6ヶ月の懲役または禁固刑を宣告され、一人が無罪となった。

(5) Inge Scholl, *Die Weiße Rose. Der Widerstand der Münchner Studenten*, Frankfurt a.M., 1952. むろん、注1に上げた『白バラは散らず』は本書の邦訳である。ただ、本稿では、邦題を用いると文脈に乱れを生じるように感じたので、敢えて原題の直訳を用いた。

かな書物は、国家反逆罪で死刑に処された弟と妹、そしてその友人たちが、自らの良心に忠実であり続けようとした、まともな人間だったのだ、と訴える、遺族の手記である。

そういう性質の書物として、当然、インゲ・ショルの記述の中心は弟と妹、なかでも弟ハンス・ショルになる。インゲ・ショルは、別に歴史家でも何でもない。大学に行っていた自慢の弟と妹が突然「売国奴」として死刑になり、自分たち家族まで連座で投獄され、住む家を追われる、という厳しい体験をした。そのような立場の遺族として、戦後、民主主義国家として再出発をするはずのドイツの人たちに、インゲ・ショルは、自分の弟と妹、そしてその友人たちの活動は、決して祖国に対する裏切りではなく、むしろ、自分たちの信ずる「正しい」ドイツを実現するための、良心の行為だったのだ、と衷心から語っただけのことである。

幸か不幸か、この語りは連邦共和国で広く受け入れられた。遺族・関係者の役割については、後でも触れるが、ここでは、この『白バラ』によって、「白バラ」イコール「ショル兄妹」という図式の、最初の下絵が描かれた、ということを確認しておきたい。インゲ・ショル自身には、もっと客観的な形で白バラの存在を提示したい、という意図がなかったわけではなく、著書『白バラ』にも、版を新たに作る機会に、あれこれの資料や証言を付録として収めたりしている。そして、1984年には、編集者として定評のあるインゲ・イエンスに原資料を委託して、ハンスとゾフィーの書簡および手稿集の公刊を果たした⁽⁶⁾。

その間、1980年には青少年向きにゾフィー・ショルの評伝が出版され⁽⁷⁾、1982年には「白バラ」をテーマとする2本の映画が制作された。映画の一方はゾフィーを主人公とし⁽⁸⁾、もう一方は「白バラ」全体像を描こうとしたものだが⁽⁹⁾、そのクライマックスはショル兄妹の大学におけるビラ配布であり、その後の逮捕・公判・処刑であって、「白バラ」イコール「ショル兄妹」というイメージ強化につながったと言ってよい。このように、1980年代までには、「白バラ」と切り離せぬ存在としてのショル兄妹のイメージが確立していたの

(6) Inge Jens (Hrsg.), Hans Scholl Sophie Scholl. *Briefe und Aufzeichnungen*, Frankfurt a.M., 1984. 邦訳は、ハンス・ショル/ゾフィー・ショル (山下公子) 『白バラの声—ショル兄妹の手紙』(新曜社, 1985年)。

(7) Hermann Vinke, *Das kurze Leben der Sophie Scholl*, Ravensburg, 1980. 邦訳は、ヘルマン・フィンケ (若林ひとみ) 『ゾフィー21歳—ヒトラーに抗した白いバラ』(草風館, 1982年)。

(8) Percy Adlon, *Fünf letzte Tage*, Pelelele/Bayerischer Rundfunk, 1982.

(9) Michael Verhoeven, *Die weiße Rose*, Sentana Filmproduktion GmbH/CCC Filmkunst GmbH/Hessischer Rundfunk, 1982.

である。

他方、ヴィリー・グラーフおよびクルト・フーバー教授については、シヨル兄妹の場合ほど効果的ではなかったものの、それぞれの遺族・関係者が中心となって、その生涯を顕彰する書物が出版されていた。クルト・フーバー教授については、インゲ・シヨルの『白バラ』よりも早く、未亡人の編で回想記が出版されている⁽¹⁰⁾。ヴィリー・グラーフに関する最初の出版物は、カトリックの出版社から1964年に出された⁽¹¹⁾。しかし、グラーフの顕彰に最も精力的に動いたのは、ヴィリーの妹アンネリーゼ・クノープ＝グラーフである。彼女は奇跡的に秘密警察の押収を逃れた兄の日記帳を保管していたが、「白バラ」の直接の関与者による唯一の事実記録であるその日記と兄の書簡を合わせて、1984年に公刊した⁽¹²⁾。

つまり、「白バラ」中心メンバー6人のうち、4人については、その規模にはかなりの違いがあるにせよ、1980年代までに、イメージ喚起の手がかりとなるまとまった出版物が存在していたのである。その後、1990年に東西ドイツの統合が実現し、「白バラ」についての秘密警察の尋問調書が資料として広く使用可能になると、シヨル兄妹のイメージに一段と光が注がれるようになった⁽¹³⁾だけでなく、ヴィリー・グラーフとクルト・フーバー教授についても、以前よりまとまった書物が発表された⁽¹⁴⁾。

(10) Clara Huber (Hrsg.), *Kurt Huber zum Gedächtnis. Bildnis eines Menschen, Denkers und Forschers. Dargestellt von seinen Freunden*, Regensburg, 1947.

(11) Klaus Vielhaber u.a. (Hrsg.), *Gewalt und Gewissen. Willi Graf und die „Weiße Rose“. Eine Dokumentation*, Freiburg, 1964. 出版元はカトリックの出版社として名高い Herder Verlag である。邦訳は、クラウス・フィールハーバー（中井晶夫／佐藤健生）『権力と良心—ヴィリー・グラーフと「白バラ」』（未来社、1986年）。

(12) Annelise Knoop-Graf/Inge Jens (Hrsg.), *Willi Graf. Briefe und Aufzeichnungen*. Mit einer Einleitung von Walter Jens, Frankfurt a.M., 1984; überarbeitete Neuauflage, 1994.

(13) 一般社会に最も影響が大きかったのは、2005年に公開された映画であろう。Marc Rothmund, *Sophie Scholl – Die letzten Tage*, Goldkind Filmproduktion GmbH & Co. KG/Broth Film, 2005.『白バラの祈り』の邦題で、2006年に日本でも公開された。この映画は、秘密警察尋問官によるゾフィー・シヨルの調書を大幅に台本に取り入れ、シヨル兄妹逮捕から死刑までを、ゾフィーに焦点を当てて描いている。注1で最後に紹介したフレート・プライナーズドルファーの編著は、この映画台本の資料部分の邦訳である。出版物としては、2010年に出されたゾフィー・シヨルの評伝が非常に高い評価を受けた。

Barbara Beuys, Sophie Scholl. Biografie, München, 2010.

また、未見であるが、2012年、初めてハンス・シヨル単独を対象とする評伝が発表されている。

Barbara Ellermeier, Hans Scholl. Biographie, Hamburg, 2012.

(14) Tatjana Blaha, *Willi Graf und die Weiße Rose. Eine Rezeptionsgeschichte*, München 2003. Rosemarie Schumann, *Leidenschaft und Leidensweg. Kurt Huber im Widerspruch zum Nationalsozialismus*, Düsseldorf, 2007.

Peter Goergen, *Willi Graf – Ein Weg in den Widerstand*, St.Ingbert, 2009.

この間、アレクサンダー・シュモレルとクリストフ・プロープストについて、それぞれの遺族・関係者が全く何も語らなかつた、というわけではない。しかし、その語り方は非常に限定的で、むしろ排他的な姿勢が目立った。典型的なエピソードを1つ紹介しておく。

シュモレルとプロープストは家族ぐるみで大変親密な関係にあったのだが、モルの編者前書きによれば、アレクサンダー・シュモレルから多数の書簡を受け取っていた、クリストフ・プロープストの姉アンゲリカは、第二次世界大戦後その書簡を保管し続けていたものの、決して公開せず、自分の死後はそれを処分するよう遺言した。1976年アンゲリカが亡くなり、保管されていた書簡をどうすべきか悩んだ家族は、ミュンヘンのあるカトリック女子修道院長に書簡の処分の判断を委ね、その結果ようやく、アレクサンダー・シュモレルのアンゲリカ宛書簡がシュモレルの遺族に返還されることになったという⁽¹⁵⁾。

1986年、ショル兄妹とヴィリー・グラーフの書簡・手稿集版元のS・フィッシャー社で担当編集者と話をする機会があった。その編集者によれば、S・フィッシャー社はショル兄妹とヴィリー・グラーフだけでなく、クリストフ・プロープストやアレクサンダー・シュモレルについても、同じ体裁で書簡・手稿集を出版し、「白バラ」シリーズにしたい、という腹案を持っており、プロープストとシュモレルの遺族とも交渉したが、うまくいかなかったそうである。かくして2000年を過ぎても、プロープストとシュモレルについては、独立した、事実の裏付けのあるまとまった出版物は存在しない状態が続くことになった。

そこから一転、2人の全書簡が編纂・公開されるについては、遺族の意向の変化が決定的な意味を持っていたはずだ。80年代にはS・フィッシャー社による出版を拒んだ遺族が、2002年にドイツ抵抗記念館に対して、公刊を前提とする書簡の提供を行うに至ったのは何故か。この点について、関係者の直接的説明はない。以下は従って、筆者の推測である。

「白バラ」メンバーは、クルト・フーバー教授など少数の例外を除いて、1943年当時、青少年であった。戦後、「白バラ」の遺族・関係者と目された人たちも、多くは同じ世代に属していた。1920年前後生まれのこの人たちは、20世紀が終わるころ、自分たちも遠からず世を去ることを意識せざるを得なくなつたはずである。

「白バラ」について最も積極的に発言を続けていたインゲ・ショルは、ハン

(15) Moll(Hrsg.), *Gesammelte Briefe*, S.4.

スとゾフィーの手稿、書簡を中心に、膨大な資料を収集していたが、自らの死後、それが散逸することなく、研究者に提供されるよう指示した⁽¹⁶⁾。彼女は1980年代半ば、アンネリーゼ・クノーブ＝グラーフなどと共に「白バラ財団」を立ち上げ、世に歴史上の「白バラ」を広く知らしめると同時に、現代社会における「白バラ」の遺志の継承を目的とする活動を行っていた。インゲ・ショルについては、「白バラ」の解釈を独占し、自分の気に入らないものは許容しなかった、という批判がある。

敢えて踏み込んで解釈すれば、彼女には自分こそ「白バラ」の本当の姿を知っている、という自負があり、生きている限り、できるだけ、自分の知っている本当の「白バラ」を後世に伝える努力を続ける、ことを自己の使命とも感じていた。けれども、自分の死後、さらに「白バラ」を正しく伝え続けていってもらうためには、本物の史料を提供し、歴史として語ってもらうしかない。およそ、このように考えたのではないか、と想像される。そして、インゲ・ショルに対して非常に批判的であったシュモレルおよびプロープストの遺族たちも、最終的には、これと同じ判断に到達したのではないかと思うのだ⁽¹⁷⁾。

2003年5月、アレクサンダー・シュモレルの異母弟エーリヒ・シュモレル、クルト・フーバー教授の長男ヴォルフガング・フーバー、クリストフ・プロープストの未亡人、ヘルタ・ジーブラー＝プロープスト、その長男ミヒャエル・プロープストなどを中心に、ミュンヘンで「白バラ研究所」が設立された。その設立目的に曰く「白バラの抵抗は完全な形で正当な評価を受けるに至っていない。白バラの歴史に関わる一次資料や文書の多くが、未だにあるべき姿で整えられ、学問的調査の対象とされるに至らぬまま残されている。従って、当組織は研究を目的とする計画を推進かつ応援する。」⁽¹⁸⁾そしてこの目的に資するため「白バラ文書館」を設立し、そこに集められたすべての遺稿類をバイエルン州立中央文書館の管轄下で特別文書館として公開する⁽¹⁹⁾、というのである。

(16) インゲ・ショルは1998年に亡くなったが、その遺志は現在、ミュンヘンの現代史研究所文書館の「インゲ・アイヒャー＝ショル遺品」(ED474)と名付けられた膨大なマイクロフィルムとなって実現している。その内容のカタログは、PDFとしてダウンロード可能である。http://www.ifz-muenchen.de/archiv/ed_0474.pdf

(2012年9月27日閲覧)。

(17) これは、筆者がインゲ・ショル、アンネリーゼ・クノーブ＝グラーフ、白バラ財団の名誉理事長フランツ・ミュラー（白バラ第二次公判の被告の一人）、そしてエーリヒ・シュモレルなどと面談した際の印象から得た結論である。

(18) <http://www.weisserose.info/>より „unsere Zielsetzung“ の一部を引用・翻訳した。

(2012年9月27日閲覧)。

(19) <http://www.weisserose.info/20940.html>

(2012年9月27日閲覧)。

これは一方でインゲ・ショルたちが設立した「白バラ財団」に対する強烈な批判（と対抗措置）である。「白バラ財団」は1990年代以降、ミュンヘン大学本部構内の白バラ記念室におけるパネル展示等で、「白バラ」とは何かを伝える啓蒙活動を行っているが、それは学問的に不完全で不当だ、と言っているに等しいのだから。ただ、「白バラ研究所」の文書館に収められた文書とは、今分かっている限りでは、モルに提供された、クリストフ・プロープストとアレクサンダー・シュモレルの書簡のようである。クリストフ・プロープストの長男ミヒャエル・プロープストが2010年に、アレクサンダー・シュモレルの異母弟エーリヒは2005年に亡くなっていることを考え合わせると、父や兄の遺した歴史的財産を、史料として客観的な使用が可能な形で社会に提供し、それによって父の、あるいは兄の存在と活動を歴史として語り継いでいってもらいたい、という願望実現のための装置として、「白バラ文書館」の目的は、インゲ・ショルの遺志と重なっているように思える⁽²⁰⁾。

今後果たしてこの「白バラ文書館」がどのような形で発展していくのかにも、目配りを忘れてはならないだろう。

(20) インゲ・ショルの義弟であり、ゾフィー・ショルの長年の恋人であったフリッツ・ハルトナーゲルとゾフィーの書簡集がハルトナーゲルの長男による編纂で出版されている。

Sophie Scholl/Fritz Hartnagel, *Damit wir uns nicht verlieren. Briefwechsel 1937-1943*, Thomas Hartnagel(Hrsg.), Frankfurt a.M., 2005.

これも、「ゾフィーの恋人」として、一種陰の存在のように見なされがちなフリッツ・ハルトナーゲルの家族が、2001年に亡くなった父は、少なくともゾフィーと同じ次元で対等に対話できる、自律した個人であることを、後世に伝えたいと願って公にしたものと考えてよいだろう。